

学校だより



令和3年 6月30日
横浜市立二谷小学校
校長 矢島 孝幸

本を読むということ

副校長 西 かおり

「副校長先生、大変です。」学校図書館から一本の連絡が入りました。何かかと思い、よくよく話を聞くと、学校図書館に子どもたちがたくさん来たため貸し出しの対応が追い付かないことへのSOSでした。つまり、うれしい悲鳴ともいえるものでした。二谷小の学校図書館には、一日に約70名の子どもたちが訪れます。読書好きのわたしにとって、本を手にとる子どもが多いことは、自分事のようにうれしいです。

読書好きと公言しているわたしですが、幼少期は、食事の時間になっても漫画が手放せない子どもで、毎日のように両親に叱られていました。今の子どもたちのようにゲームやインターネットのような楽しいツールがなかったことも一因だと思いますが、とにかく漫画漬けの毎日でした。そんなわたしが読書に目覚めたのは小学校6年生のときでした。すでにきっかけが何だったのか記憶の彼方へ行ってしまいましたが、あるとき、友達と競争をすることになったのです。学校図書館の棚にシリーズで何十冊と並んでいる外国のミステリー小説をどちらが早く制覇するかという競争です。そこで、わたしは、心密かに作戦を立てました。一日一冊、読破することにしたのです。最初は、「読書」という作業をしているにすぎませんでした。とにかく負けたくない一心で。それがいつの間にか「次はどんな話なんだろう。」とわくわくしながら本を読むようになっていました。すべての本を読み終えたとき心に残ったのは、勝負の行方ではなく読書の楽しさに出会えた充足感でした。

『本の中には、まったく新しい世界が広がっているんだよ。旅行に行く余裕がなくても、本を読めば心の中で旅することができる。本の世界では、何でも見たいものを見て、どこでも行きたいところに行ける。』

ある著名な方の言葉です。この方は、本の世界で広がったイマジネーションを現実の世界で叶えようと事業に取り組み成功を収めます。情報を得るため、調べ物をするため、好きな絵が挿絵だからなど、本を手にする理由やきっかけは人それぞれだと思います。小学生のうちは見向きもしなくとも中学生になったら、もしくは大人になったら興味のある一冊に出会うかもしれません。本を読むということは、新しい自分や新しい世界に出会うための入り口なのではないかと思います。二谷小の子どもたちにも、いつか新しい世界と出会うために本を読んでほしいなと思います。